

ASEAN主要国の外相と経済相

《タイ》

■外相 Minister of Foreign Affairs
スラクアット・サティアンタイ(博士)
Surakiat Sathirathai, Dr.



チュラロンコン大学法学部で教鞭をとっていた1980年代から(バンハーン政権で短期間、財務相に就任したのを除けば)歴代政権で政策顧問、公社理事長など比較的に目立たない場所で政治に関わってきたが、2001年2月のタクシン現政権の成立で就任を待望してきた外相に任命された。タクシン党首(現首相)が98年に創設したタイ愛国党(TRT)に参加し、同党の政策ブレーンの一人として活動してきた努力が報われた形である。

スリン前外相(現・民主党下院議員)と同じ米ハーバード大学で博士号を取得した米国通だが、スリン氏が欧米流の人権外交に理解を示すリベラルだったのに比べると、同(スラクアット)氏は東南アジア諸国連合(ASEAN)の伝統的な外交手法である対話とコンセンサスを重んずる「アジアの道」路線を目指している。

※政治活動歴はチャチャイ政権時代の89年に始まる。チャチャイ首相(当時)が「パーン・ピサヌローク(首相官邸)」に顧問として集めた数人の若手学者は共和制国家の「大統領補佐官」のように行動した。この顧問チームのリーダー格だったのが法学者の同(スラクアット)氏である(一方、これらの顧問を厳しく批判したのが後にチュアン政権で外相に就任するスリン下院議員)。

95年発足のバンハーン政権ではタイ国民党(CTP)枠で37歳の若さで蔵相に就任。しかし、96年5月の内閣改造で更迭され屈辱を味わった。その後、チャワリット政権で首相経済・外交問題顧問、チュアン政権ではタイ石油公社(PTT)理事長などを歴任し、それぞれの役職から経済問題に歯に衣着せぬ発言を行った。経歴から伺われるように、元来、様々な政治家と親交を結ぶのが上手いという側面がある。

▼データ

【現職】外務大臣
【政党】タイ愛国党(TRT)
【年齢】44歳(1958年6月7日生まれ)
【生地】バンコク
【学歴】チュラロンコン大学法学部卒(優等)(1979)
1981: 米タフツ大学で修士号(法律・外交)取得
1982: 米ハーバード大学で法学修士号/(1985)同博士号取得

【経歴】チュラロンコン大学法学部副部長(国際関係)

1989: (チャチャイ)首相政策顧問兼国会議長顧問(-91)

投資委員会(BOI)理事(-91)

1992: チュラロンコン大学法学部長

首相府国際経済政策調整センター顧問

1995: [7月] 財務相(バンハーン内閣)

1996: (チャワリット)首相経済・外交顧問委員会副議長

1998: [5月] タイ石油公社・探査生産社(PTTEP)会長

1999: [11月] PTT理事長(-00)

2001: [1月] 下院議員に初当選

(TRT比例第11位)

2001: [2月18日] 外相(タクシン内閣)

【歴任】サイアム・プレミア・インターナショナル法律事務所会長(1990-2001)

1995: 証券取引委員会(SEC)委員長(-96)

【趣味】読書

【家族】スタワン(Khunying Dr. Suthawan)夫人

【横顔】ストン・サティアンタイ(Suthorn Sathirathai)元大蔵省財政政策局長の一人息子(ストン氏は大蔵省退官後、バンコク・シティ銀行、レームトーン銀行の役員を務めた財政・金融政策の専門家)。

*95年のバンハーン政権発足時にバンハーン首相は当初、同氏を外相に任命する予定だったが、外相が当時の連立与党・タイ指導党(NTP)枠になったため、同氏を財務相に任命せざるを得なかったという経緯がある。タクシン政権の成立直前にも政界では財務相候補の一人として名前が挙がったが、結局は「同氏は外相向き」と論評していた地元マスコミの予想通りになった。

*〈訪日歴〉2001年11月(タクシン首相の日本公式訪問に同行)、2002年1月(アフガン復興国際会議)、同年5月

■商業相 Minister of Commerce

アディサイ・ポータラミック(博士)

Adisai Potharamik, Dr.



日本の経済産業相のカウンターパートは、タイの場合は商業相であり、日本・アセアン経済閣僚会合(AEM-METI)や日中韓・アセアン経済閣僚会合などには同(アディサイ)氏が出席している。

2001年2月発足のタクシン現内閣で商業相に抜擢された。入閣前は通信大手「ジャスミン・グループ」の総帥(オーナー/CEO)で「タイ電話・電気通信株式会社」の共同創業者。タイの通信分野でタクシン首相に次ぐ富豪といわれ、01年1月の総選挙では、タイ愛

国党(TRT)の比例代表名簿で(多くのベテラン政治家を差し置いて)第5位という高位で遇されている。

タイでは、同(アディサイ)氏もそうだがタクシン首相(雲南系)をはじめとして政財界に(人種的には)華人が多いこともあり、ASEANとの自由貿易協定(FTA)締結を重視する中国はタイが協議をリードすることで交渉を進めさせたいとの意向を持っている。同氏も「ASEANと中国の自由貿易圏の設立で、人口17億人、経済規模で2兆ドル余りの巨大市場が誕生することになる」と積極的な姿勢を示している(ただし、ASEAN加盟国の一部には、中国とのFTAに熱心なタイとシンガポールを「華人枢軸」として警戒する声があるのも確かだ)。

※元来は電気通信の技師・専門家。現内閣で商業相に就任する以前の政治家としての経歴は、運輸・通信省で顧問(政治職)に就いたのを最初に、上院議員(任命制)とチュアン前政権最後の改造内閣(2000年6月)で首相府相(観光行政担当)を務めただけ。元々、国家開発党(CPP)の財政スポンサーの一人として知られたが、上述のチュアン政権で非議員(当時)ながらCPP枠で入閣したことなどを巡って、同党幹部と対立。こうした背景もあり、2000年11月にタイ愛国党(TRT)に移籍した。01年1月の総選挙でTRTの比例代表で初当選(議員職は、規定に従い閣僚就任とともに辞任)。

▼データ

【現職】商業大臣
【政党】タイ愛国党(TRT)
【年齢】62歳(1940年4月23日生まれ)
【生地】バンコク
【学歴】チュラロンコン大学工学部卒(1962)
1967: 米ハワイ大学で修士号(電気工学)取得
1970: 米メリーランド大学で博士号(電気工学)取得
【経歴】タイ電話公社(TOT)技師(1966)
1970: TOT通信線路土木工事(outside plant)設計センター所長(-78)
運輸通信相顧問
1978: ジャスミン・インターナショナル社会長(-2000)
1996: 上院議員(任命制)
1998: タイ電話・電気通信株式会社会長(-99)
2000: [6月] 首相府相(チュアン改造内閣)
2001: [1月] 下院議員に初当選(TRT比例第5位)
[2月18日] 商業相
【家族】ピチャニー(Phichani)夫人
【横顔】通信事業を創始する前は、化学製品メーカーの販売部門で大きな業績を挙げた経験もあり、タイ製品の海外への販路拡大に一

層尽力して欲しいとの経済界の期待がかけられている。

※2000年6月の入閣(チュアン改造内閣)の際に規定に従い公表した個人資産の総額は27億パーツ(約6,250万ドル)。

※〈訪日歴〉2001年11月(タクシン首相の日本公式訪問に同行)

《フィリピン》

■外相 Secretary of Foreign Affairs
ブラス・オブレ
Blas F. Ople



テロ対策で米国との軍事関係強化を図るアロヨ大統領に批判的だったギンゴナ副大統領が兼任していた外相職から辞任したのを受けて、昨年(2002年)7月30日に後任の外相に就任した。野党陣営に所属する上院議員だったが、上院外交委員長を1992年以来務めてきた外交問題での豊富な経験に加え、「親米的」な点で大統領の政策に近い点が買われた。

就任直後の8月上旬、訪比したパウエル米国防務長官と米比間の軍事・経済協力を協議し、中旬には「東アジア開発イニシアティブ(I D E A)」閣僚会合のため来日した。10月下旬に(メキシコ)ロスカボスで開催されたアジア太平洋経済協力会議(A P E C)閣僚会議では北朝鮮の核開発問題について強い懸念を表明。12月下旬には、記者会見で日本のイージス艦派遣を評価し、テロとの戦いに対する「日本のさらなる支援」を期待する考えを示した。

※1940年代から90年代まで新聞・雑誌の編集者・コラムニストとして活動。特に「デイリー・ミラー」紙に連載した「ジプニー・テイルス(Jeepney Tales)」はその軽妙なタッチで定評があった(一方で、フィリピン大学などの講師も務めた)。57年にマグサイサイ大統領の補佐官として政界入り。20年に及ぶマルコス政権下では一貫して労相の任にあり、「海外雇用プログラム」を推進したが、これがフィリピン人の海外労働者が飛躍的に増大した契機になっている。

86年に成立したアキノ政権下では野党・国民党を組織し、政権に対して「批判的勢力」の立場をとった。92年からのラモス政権下ではラバン党員として上院多数派に所属し外交委員長に就任。しかし、95年のアンガラ上院議長(当時)更迭劇で同議長とともに上院少数派に転じた。96年のマセダ議長就任で上院副議長に就任。

98年の上院選では、エストラダ政権で与党LAMP所属で再選を果たし外交委員長に返り咲いた。99年7月、フェルナン上院議長の死去に伴い00年4月まで上院議長を務めている。

▼データ

【現職】外務大臣(長官)

【年齢】75歳(1927年2月3日生まれ)

【生地】ブラカン州ハゴノイ

【学歴】フィリピン大学およびマヌエル・L・ケソン大学(M L Q U)で学ぶ
アジア教育センター(旧ケソン大学)卒(教養学士)

【経歴】(マグサイサイ)大統領補佐官(労働・農業問題担当)(1957)

1967: 労相(マルコス政権)(-86)

1984: 国民会議議員

1986: 憲法起草委員会野党代表委員

1992: 上院議員に初当選
上院外交委員長(-95)

1996: [10月] 上院副議長

1998: [5月] 上院議員再選
上院外交委員長

1999: [7月] 上院議長(-00: [4月])

2000: [4月] 上院副議長兼上院外交委員長(-01: [5月])

2001: [6月] 上院外交委員長

2002: [7月30日] 外相に就任
(アロヨ政権: 上院議員は辞任)

【歴任】国際労働機関(I L O)
第60回総会議長(1975)

【家族】スサナ(Susana Vasquez)夫人との間に7子

【横顔】父フェリックス(Felix Antonio Ople)が小船の修理工をする貧しい家庭に育った。太平洋戦争中は故郷ブラカン州の部隊に少年兵として入隊し、戦後に高校を卒業したという苦学人である。大学卒業後に「デイリー・ミラー」紙の入社テストを受けた時に、編集幹部が同氏の校閲能力の高さに驚いたというエピソードがある。

※エストラダ前大統領の弾劾裁判では、終始前大統領を擁護する立場を貫いた。前大統領の銀行口座記録開示を問う採決では、開示反対に投票している。

※東南アジアでのテロとの戦いに日本の軍事面での協力を期待する考えを示しており、「(日本がそうした役割を担っても)軍国主義の復活につながるという懸念は持っていない」と言明している。

※〈訪日歴〉2000年10月(日本外務省のオピニオン・リーダー招聘)、2002年8月(I D E A閣僚会合)。

■貿易産業相

Secretary of Trade and Industry
マヌエル・ロハス
Manuel A. Roxas II



2000年1月、エストラダ前政権がエスピリトゥ財務相(当時)の辞任に伴い閣僚の改造人事を実施した際に下院院内総務から貿易産業相として初入閣した。しかし、エストラダ前大統領の賭博献金疑惑が発覚して1月も

たない同年11月に同職を辞任した。この辞任は社会福祉開発相(兼任)を辞任したアロヨ副大統領(当時: 現大統領)に続くもので、この後閣僚や与党議員の政権離れが加速し、エストラダ政権崩壊に繋がった。2001年1月に就任したアロヨ大統領によって貿易産業相に再任された。再任は、アロヨ政権誕生に果たした役割に対する「論功行賞」の側面もあるが、大統領が同(ロハス)氏の実務能力を評価していたのも事実だ。

最近の決裁事項としては、昨年(2002年)11月に投資委員会(B O I)の下にB O I登録企業や投資家が抱える問題の仲裁機関を設立したことが注目される。この機関は主に苦情処理と情報提供などを通じて、企業が抱える問題を効率的に解決する役割を果たす。フィリピンにとって投資誘致でライバルとなる国や地域と比較して、競争力を付けることに尽力している。

※1946年にアメリカからの正式な独立とともに発足した第三共和制のマヌエル・ロハス元大統領(在任1946-48)の孫という毛並みのよさ。米国で大学教育を修了した後はニューヨークを中心に10年以上ビジネス界に身を置いた。帰国して下院議員に転じ、40代初めに議員を(憲法規定で最後の任期になる)3期目の途中まで務めた。2000年1月にエストラダ前大統領によって貿易産業相に抜擢されて後の政治的変遷は上述の通り。フィリピンにおける「新世代」政治家の代表格。

▼データ

【現職】貿易産業大臣(長官)

【年齢】45歳(1957年5月13日生まれ)

【学歴】アテネオ・デマニラ大学(1年間在学)
1976: 米ペンシルバニア大学卒(経済学)
米ハーバード大学で修士号取得
(公共行政学)

【経歴】下院議員(3期: カピス州)
(1993-2000)

1998: 下院多数派院内総務

2000: [1月] 貿易産業相(エストラダ政権)
[11月] 貿易産業相を辞任

2001: [1月26日] 貿易産業相に再任(アロヨ政権)

【歴任】Allen & Co. 副社長、プログレシブ開発会社副社長、MYAPOエビ養殖場社長、ノーススター・キャピタル社社長、アトク・ビッグ・ウェッジ鉱山会社社長、ベンケット社、カウスワガン開発会社、カリマ・インターナショナル、マニラ・スタンダード各社取締役

【活動】マヌエル・A・ロハス財団総裁

【家族】独身

【横顔】アジア問題専門誌「アジア・ウィーク」やスイスの「ワールド・エコノミック・フォーラム」などから「明日のグローバル・リーダー」の一人として特集記事で取り上げられたことがある。

※東南アジア諸国連合(A S E A N)と日本との自由貿易協定がフィリピンに有利に働くとの見解を繰り返し表明。これには農産物や工業製品などで競合する中国を牽制する狙いがありそうだ。

*上述のBOI仲裁機関設立の1年前(2001年)には、労働雇用省(DOLE)と共同で労働問題解決のための「クイック・リアクション・チーム(QRT)」を設立しているが、日系企業などから労働争議の発生件数が減少するなど一定の効果を上げているとの評価を得ている。

*フィリピンの農村社会の近代化には、非政府組織(NGO)の活動と教育の機会均等によるところが大きいとの信念を持っている。

*〈訪日歴〉2001年3月および9月(後者はアロヨ大統領訪日に同行)。2002年5月の大統領の東京・大阪実務訪問にも同行(経団連主催の「フィリピン投資セミナー」等)。

《マレーシア》

■外相

Minister of Foreign Affairs
サイドハミド・アルバル
Syed Hamid Albar, Datuk



1999年1月の内閣改造で国防相から外相に横滑りして丸4年を経過した(99年の改造人事では、マハティール首相がアンワル前副首相の解任・逮捕で空席になっていた副首相にアブドゥラ外相〔当時〕を任命したために外相の後任が必要になった)。外相就任以前からアブドゥラ氏が外遊中に外相代行を務めており、東南アジア諸国連合(ASEAN)の外交界では「古顔」。

昨年(2002年)は、前年以來の(マレーシアが供給している)水の値段に関する交渉などでシンガポールと対立し、インドネシア、フィリピンとは(マレーシアに在住する)両国の不法就労者に対する扱いの問題でギクシャクが続くなど、他のASEAN加盟国との外交問題が浮上した。国際会議では、4月上旬にイスラム諸国会議機構(OIC)のテロ問題に関する特別外相会合をクアラルンプールで主宰。

2003年は、2月にマレーシアで第13回非同盟諸国首脳会議が開かれるが、「グローバル世界が進行する21世紀にふさわしい非同盟運動の強化に見合うようなテーマ」(同氏)をどう設定するのか。また、マハティール首相退任の「花道」になるとされる10月のOIC首脳会議もある。一方で、昨年10月のアジア太平洋経済協力会議(APEC)首脳会議(ロスカボス)で米国から正式提案があった「反テロセンター」のマレーシアへの設置という懸案にも取り組まねばならない。

※英ミドル・テンブル法学院で学んだ。1990年に下院議員に初当選し首相府相に就任して以来、現在まで法相、国防相、外相と一貫して閣僚職にある。弁護士出身の政治家らしく熱弁家で「(与党連合の中核政党)UMNOのライオン」との異名を取る。忠実な「マハティール派」の一人。

▼データ

【現職】外務大臣
【政党】統一マレー国民組織(UMNO)
【年齢】59歳(1944年1月15日生まれ)
【生地】ペナン
【人種】マレー人
【学歴】英ミドル・テンブル法学院卒(法曹資格取得)(1970)
豪モナッシュ大学経済学・政治学修了
【経歴】下級判事(1970)
1972: 個人弁護士事務所開業
バンク・プミプトラ・マレーシア法律顧問
1979: 同バンクのジェネラル・マネジャー(-82)のち、最高経営責任者(CEO)
シャムリン・ホールディングス社、アルバル・ホールディングス社会長
1990: 下院議員に初当選(以降、計2選)
首相府相(法務担当)
1992: 法相
1995: [5月] 国防相
1999: [1月11日] 外相
[11月29日投票] 下院議員に再選(コタティンギ選挙区)
[12月14日] 外相に再任

【歴任】マレー商業会議所事務総長
【党歴】英国UMNOクラブ初代会長(1982)
1996: UMNO最高評議会任命メンバー(-2000)
【家族】シャリファ・アジア(Sharifah Aziah)夫人との間に4人の子供
【横顔】父は穏やかだが、カリスマ的な指導者として知られた故ジャファル・アルバル。
*96年UMNO党大会では、副総裁(3ポスト)選挙に立候補し、次点で落選。のちに、マハティール総裁によりUMNO最高評議会任命メンバーに任命されている。2000年5月の副総裁選挙でも落選(現在は最高評議会メンバーには入っていない)。
*〈訪日歴〉1999年6月、2002年1月(アフガニスタン復興支援国会議)

■通商産業相

Minister of International Trade and Industry
ラフィダ・アジズ
Rafidah Aziz, Datuk Seri



有力ポストである通産相を1987年以来、一貫して務める東南アジア諸国連合(ASEAN)でも「古参」の女性閣僚。例年の貿易・投資促進ミッションなど様々な機会に来日しており、日本の経済界にも馴染みの顔といえる。2001年の日本・マレーシア間の貿易総額は約259億ドルで、日本はマレーシアにとって第2位の貿易相手国(第1位は米国、第3位はシンガポール)であることを考えれば、来日の頻繁さは当然ともいえるが、親日家であるマハティール首相の意向が大きいのも否めない。02年7月に大阪と東京で開催された「マレー

シアにおけるビジネス機会セミナー」(マレーシア工業開発庁などが主催)では、基調講演で、マレーシア経済の現状や展望、人材開発やインフラ整備に対する政府の取り組みなどを詳細に説明した。一方で、これに先立つ6月上旬には、何かとギクシャクしている米国との関係修復・強化のために、米国のサンホセ、サンディエゴなどを訪問し、米国からの投資勧誘にも務めている。

※与党連合の中核政党・統一マレー国民組織(UMNO)の党務では、84年以来女性(Wanita)部長ポストを維持してきたが、96年の同部長選挙で当時「アンワル派」と目されていたシティ・ザハラ・スライマン現国民統合・社会開発相に敗れた。2000年5月の選挙ではシティ・ザハラ氏を12票の僅差で破り、同部長に返り咲いた。ただ、女性部内には貧困層に対する草の根活動を重視するシティ・ザハラ前部長を支持する部員も依然として多い。

▼データ

【現職】通商産業大臣
【政党】統一マレー国民組織(UMNO)
: 女性(Wanita)部長
【年齢】59歳(1943年11月4日生まれ)
【生地】ペラ州スラム
【学歴】マラヤ大学卒業(経済学士: 優等)(1966)
1970: 同大学で修士(経済学)取得
【経歴】マラヤ大学助手(1970)
1973: 同大学地域開発科講師
1974: 上院議員(任命制: 最年少-31歳)(-78)
1976: 公共事業省政務次官
1977: 副財務相(-80)
1978: 下院議員に初当選(以降、計5選)
1980: 公共事業相
1987: 通産相
1999: [11月29日投票] 下院議員に再選(クアラカンサル選挙区)
[12月14日] 通産相に再任

【歴任】英連邦議会協会執行委員会委員
【党務】UMNO女性部(Wanita)に参加(1970)
1974: UMNO最高評議会メンバー
1980: Wanita 副部長
1984: Wanita 部長
1996: Wanita 部長選で落選
2000: [5月10日] Wanita 部長に返り咲く

【家族】夫君は中銀幹部のモハマド・バシル・アフマド(Basir Ahmad)氏。子供3人
【横顔】マハティール首相が提唱し、一時期アジア諸国で論議を呼んだ東アジア経済会議(EAEC)構想では「旗振り役」で、日本が米国に配慮して同構想に優柔不断な態度なのを批判したことも。

*1995年5月発足の政権では、通産相更迭が確実視されていた(政界通は同氏が南アフリカ大使として転出し、同年総裁補〔一現在〕に当選したムヒディン・ヤシン現国内取引・消費者行政相が通産相に就任すると見ていた)が、同氏を高く買うマハティール首相は周囲のアドバイスをよそに同氏の続投を決めたという経緯がある。

*昨年(2002年)6月22日にUMNO党大会の閉会演説で突如マハティール首相が涙ながら

に辞任を表明した時、真っ先に壇上に駆けつけ「ノー」を絶叫したのが同(ラフィダ)氏だった(その後、首相とUMNO幹部が話し合った結果、首相の03年10月退任のシナリオが決定)。

*過去に、ある上場企業の株を義理の息子に割り当てる工作をしたとして、汚職の容疑がかけられたこともあった。汚職取締局は同氏に不正は認められないとの結論を出したものの、多分に縁故主義や「金権体質」のイメージが付きまわっているのも事実である。次期首相が内定しているアブドゥラ副首相兼内相は「UMNOのミスター・クリーン」との異名をとるだけに、同(ラフィダ)氏が次期政権でも同じポストにいるかどうかはわからない。
*〈訪日歴〉1997年3月(マハティール首相〔公賓〕に同行)、98年7月(貿易・投資促進ミッション)、99年7月(同)、2000年2月(ASEAN投資機会セミナー)、00年4月(日・マ経済協議会合同会議)、00年7月(貿易・投資促進ミッション)、01年4月、02年7月(同)

《シンガポール》

■外相兼法相

Minister for Foreign Affairs and Minister for Law

S・ジャヤクマール(教授)

Shunmugam Jayakumar, Prof.



1994年以来、外相(法相兼任)の任にある。また、シンガポールは2001年初頭から昨年(2002年)末まで国連安全保障理事会の非常任理事国であり、同(ジャヤクマール)氏は安保理議長としての重責も果たした。

昨年(2002年)、日本とシンガポールとの関係で画期的だったのは、小泉純一郎首相とゴ・チョクトン首相が1月に署名した両国間の自由貿易協定(FTA)。同協定に関する文書交換は同(ジャヤクマール)氏と横田邦彦駐シンガポール大使との間で行われ、11月30日に発効した(日本にとっての初のFTA)。近隣国との関係では、マレーシアとの供給水の値段に関する交渉のこじれや、インドネシアとのテロ対策上の不協和音などがまだ解決すべき課題として残されている。

※1980年に政界入りした。閣僚経験ではリー・クアンユー上級相(前首相)、ゴ・チョクトン首相に次いで豊富。年齢ではゴ首相、トニー・タン副首相兼国防相ら(「第1世代」のリー上級相に続く)「第2世代」政治家と同じ60歳前半の世代に属している。しかし、ゴ首相らのように与党・人民行動党(PAP)が官僚から閣僚へと育成した「政治テクノクラート」ではないので一般的には「第2世代」政治家には入れない。次期首相就任が「既定路線」になっているリー・シェンロン副首相(リー上級相の長男)が率いる次期政権では、

外相ポストは「第3世代」が担い、同(ジャヤクマール)氏は政界を退く可能性がある。シンガポール国立大学法学部長を務めた法学者で、現政権きっての学者肌の閣僚である。

▼データ

【現職】外務大臣兼法務大臣

【政党】人民行動党(PAP)：副委員長(副党首)

【年齢】63歳(1939年8月12日生まれ)

【生地】シンガポール

【人種】インド人

【学歴】ラッフルズ・インスティテューション卒

1963：シンガポール大学(現NUS)

法学部卒(優等)

1966：米エール大学で法学修士号取得

【経歴】法曹資格を取得(1964)

1964：シンガポール大学法学部講師

(後に教授、-81)

1971：外務省勤務となり国連シンガポール政府

代表部大使兼駐カナダ高等弁務官(大使)

1974：シンガポール国立大学法学部長(-81)

国連海洋法条約会議シンガポール代表

団メンバー(-79)

1980：国会議員に初当選(以降、計5選)

1981：法務兼内務担当内務相

1984：労相兼第二法相兼第二内相

1985：内相兼第二法相

1988：法相兼内相

1994：[1月]外相兼法相

2001：[11月3日投票]国会議員に再選

(イースト・コースト集団選挙区)

[11月23日]外相兼法相に再任

【趣味】ジョギング、ゴルフ、バドミントン、水泳

【家族】ラリタ・ラジャラム(Lalitha Rajaram,

Dr.)夫人(医師)との間に2男1女

【横顔】『Cases on Public International Law from

Malaysia and Singapore』等の3著書がある。

憲法、国際法、法学教育に関する32の論文。

*〈訪日歴〉1995年5月(外賓)・11月、97年

5月(外賓)、98年6月、99年12月(ゴ首相

に同行)、2000年8月(外賓)・10月(首相に同

行)、02年11月

■貿易産業相

Minister for Trade and Industry

ジョージ・ヨー(ヨンブン)(予備役准将)

George(Yong-Boon)Yeo, Brig-Gen(NS)



1988年に政界入りしており、現在50歳に近い「第3世代」閣僚としては、同世代のリーダーであるリー・シェンロン副首相に次いで政治歴は長い。しかも、驚異的な早さで要職を歴任してきた。どちらかといえば、知的なイメージが強く、情報芸術相時代には消息筋の間で将来の外相候補との見方もあった。カトリック教徒だが、中国の精神的伝統も重んじるタイプで、特に文化的な価値の継承にはその文化を生み出した言語の習得が不可欠であるとする立場を強調している。

経済分野は、第二貿易産業相時代も含めると97年から一貫して担当。特に昨年(2002年)、日本との関係で取り組んだのは、小泉首相が1月にASEANを歴訪した際に提唱した「日本アセアン包括的経済連携構想」の具体化。3月の訪日時に平沼経産相と会談し、急速な経済成長を続ける中国とのバランス、(ASEANの要である)インドネシアの安定への支援、日本の資本・技術力の一層の導入などでの両国連携の必要性を強調した。
※1970年実施の中学校卒業資格試験(OLレベル)で全国トップとなり、文字通り「シンガポールで一番頭の良い少年」として知られた。「次期首相」であるリー副首相同様、英ケンブリッジ大学(学士)と米ハーバード大学(修士)で学び、統合参謀本部に務め准将に昇進。この時点(88年)で予備役となり政界入りしたが、こうした経歴の点でも副首相そっくりである。

▼データ

【現職】貿易産業大臣

【政党】人民行動党(PAP)：中央執行委員

【年齢】48歳(1954年9月13日生まれ)

【生地】シンガポール

【人種】華人(華語名：楊 榮文)

【学歴】セント・ジョセフズ・インスティテューション卒

1973：大統領奨励学生・シンガポール国軍

(SAF)奨励学生

1976：英国ケンブリッジ大学卒

(工学士：2科目最優秀)

1985：米国ハーバード大学で修士号

(経営学：優等)取得

【経歴】シンガポール国軍に入隊(1972)

1973：少尉に任官(国軍奨励学生としてケンブリッジ大学に留学)

1976：米ジョージア州フォート・ゴードン

陸軍通信・電子学校で通信将校基礎

コースを修了

1977：シンガポールに帰国し、通信大隊

(6SIR)将校

1978：第3師団通信支援中隊長

1979：シンガポール参謀大学を首席で卒業

1981：空軍作戦部長

1985：米留学(ハーバード大学)から帰国空

軍参謀長

1986：国防省統合作戦計画局長

1988：准将に昇進後、予備役に

[9月]国会議員に初当選

(以降、計3選)

財務・外務担当内務相

1990：[11月]情報芸術相代行兼外務担当

上級内務相

1991：[7月]情報芸術相兼第二外相

1994：[1月]情報芸術相兼保健相

1997：[1月]情報芸術相兼第二貿易産業相

1999：[6月]貿易産業相(専任)

2001：[11月3日投票]国会議員に再選

(アルジュニード集団選挙区)

[11月23日]貿易産業相に再任

【趣味】読書、旅行、水泳、ジョギング、ゴルフ(自ら「ヘタの横好き」と評している)

【家族】1984年にジェニファー(Jennifer Leong Lai Peng)夫人(弁護士)と結婚。3男1女
 【横顔】ケンブリッジ大学在学中は同大マレーシア・シンガポール協会会長も務め、早くから指導者としての資質を示している。1976年には英国土木工学協会賞(経営学)を受賞。
 ＊〈訪日歴〉91年10月、92年9月、95年5月・6月・9月、98年9月、99年5月、99年12月(ゴエ首相に同行)、2000年10月(首相に同行)、02年3月(平沼経産相と会談)

《インドネシア》

■外相

Minister of Foreign Affairs
 ハッサン・ウィラユダ(博士)
 N. Hassan Wirayuda, Dr.



2001年8月10日のメガワティ内閣発足時に外務省政務総局長から外相に抜擢された。それまでは、アチェ特別州の分離・独立組織「自由アチェ運動(GAM)」との対話交渉でインドネシア政府の代表として知られており、GAM側からの信頼も厚いものがあった。アチェ問題に最も精通した外交官とされる(もっとも、昨年〔2002年〕12月初旬に政府とGAMとの間で「敵対行為停止のための枠組合意」が署名されるまでの過程では、ユドヨノ政治・治安担当調整相ら治安関係者の声ばかりがマスコミで取り上げられた感がある)。

昨年10月中旬に発生したバリ島爆弾テロに前後する域内外各国とのテロ対策上の協力・調整でも、ヘンドロプリヨノ国家情報庁(BIN)長官(閣僚)などの治安担当者が外務省の頭越しに行動することも多く、同(ウィラユダ)氏の影が薄い印象がある。

昨年12月22日から27日まで外務省賓客として来日。川口順子外相との間でアチェ問題、テロ対策、投資環境、国際情勢などについて会談したほか、財界関係者とも意見交換した。※「生まれつきの外交官」といわれ、外務省の「ライバル」たちでさえ同氏の外相就任を祝福した。メガワティ大統領には外交実務を補佐するテクノクラートが必要であり、同氏の外相起用にはあまり党派的な背景はないといっている。外務官僚一筋のキャリアを歩み、駐エジプト大使、駐ジュネーブ代表部大使などを経て、外務省政務総局長。1989年から98年にかけて、国連総会、同安保理事会、国連人権委員会、東南アジア諸国連合(ASEAN)の各種会合では常にインドネシア代表団の高級随員として参加していた。また、1990年には、インドネシア国家人権委員会の設立に参加するとともに、93-97年まで同委員会のアドバイザーを務めている。

▼データ

【現職】外務大臣
 【年齢】54歳(1948年7月9日生まれ)
 【生地】西ジャワ州タンゲラン
 【学歴】インドネシア大学法学部卒(1971)
 1984:米タフツ大学で修士号(法学・外交)取得
 1985:米ハーバード大学で修士号(法学)取得
 1987:米ヴァージニア法律大学校で博士号取得
 【経歴】外務省入省(1974)
 1989:駐ジュネーブ代表部公使参事官(政務)
 1993:外務省国際機関局長
 1997:駐エジプト大使
 1998:駐ジュネーブ代表部大使
 2000:[7月]外務省政務総局長
 2001:[8月10日]外相

【趣味】読書

【家族】夫人および4子
 【横顔】令嬢(ニックネームはアストリッド)は日本(九州)の大学に留学した経験がある。
 ＊〈訪日歴〉2001年9月(メガワティ大統領の非公式訪問招待に同行)、02年8月(東アジア閣僚イニシアティブ〔IDEA〕閣僚会合に出席)・12月(外賓)

■経済担当調整相

Coordinating Minister for Economic Affairs
 ドロジャトン・クンチョロジャクティ
 (教授・博士)
 Dorodjatun Kuntjoro-Jakti, Prof.Dr.



日本の経済産業相のカウンターパートは、インドネシアの場合は経済担当調整相であり、日本・アセアン経済閣僚会合(AEMETI)や日中韓・アセアン経済閣僚会合などには同(ドロジャトン)氏が出席している。ただ、調整相職は各省大臣を統括する「上級相」であり、債務返済、金融制度改革、貿易・投資振興、国内消費回復など経済運営全般に責任を負っている。管掌する各省大臣には、財務相、貿易産業相、鉱山エネルギー相、国営企業担当国務相などがある。

インドネシア大学経済学部教授の時代から、アジア太平洋経済協力会議(APEC)や東南アジア諸国連合(ASEAN)傘下の専門家チームのメンバーなどを歴任しており、国際社会からの認知度は高い。また、政治勢力から距離を置くテクノクラートであり、国際通貨基金(IMF)など国際機関の業務も熟知していることから、先進諸国の経済関係者からも信頼を得ている。

昨年(2002年)5月に開催された国際交流会議「アジアの未来」2002(日本経済新聞主催)における講演では、1998年にマイナス13%に落ち込んだインドネシアの成長率もここ2年は4%台を確保していると指摘。未解決の課題として失業や貧困の解消を挙げたが、国有企業の民営化や産業育成、投資市場の整備などを通じて「東南アジアの大国」の地位を確保するとの意気込みを強調した。

※駐米大使に任命される前は経済学者としての経歴がほとんど。西欧諸国は同氏が経済分野のトップに就任したことを歓迎している。スハルト政権時代からインドネシアには「パークレー・マフィア」と呼ばれる経済テクノクラート集団があるが、同氏はメガワティ政権の「パークレー派」というところか。

ワヒド前大統領と懇意で、1999年10月に発足したワヒド「国民統一」内閣で社会福祉担当調整相のポストを打診されたが、この時は入閣を断っている。それ以来、内閣改造時にはいつも経済担当調整相の有力候補として名前が上がっていた。

▼データ

【現職】経済担当調整大臣
 【年齢】63歳(1939年11月25日生まれ)
 【生地】バンテン州ランカスピトゥン
 【学歴】インドネシア大学卒(経済学)(1964)
 1966:米カリフォルニア大学(パークレー)で修士号(公共行政学)取得
 1981:同大学で博士号(政治経済学)取得
 【経歴】インドネシア大学(U I)経済学部教授・経済学部長(1994)
 1998:[3月]駐米全権大使(第14代)
 2001:[8月10日]経済担当調整相
 (メガワティ内閣)

【歴任】非同盟諸国会議経済専門家
 インドネシア国軍参謀学校、
 国防研修所(Lemhanas)各客員教官
 太平洋ビジネス・フォーラム(PBF)
 専門家チーム・メンバー
 1994:アジア太平洋経済協力会議(APEC)
 専門家チーム・メンバー(-97)
 APECビジネス顧問委員会委員
 東南アジア研究所(I SEAS:シンガポール)地域安全保障プログラム・メンバー
 カリフォルニア大学(パークレー)国際・地域研究スクール顧問委員会委員
 米国ASEANビジネス協議会メンバー

【趣味】読書(経済学ばかりでなく、哲学、文学、歴史、神話など分野は幅広い。川端康成、三島由紀夫などの著作にも詳しい)

【家族】エミワティ(Emiwaty)夫人との間に3子
 【横顔】愛称は「ジャトゥン(Djatun)」

＊スハルト政権下の1974年1月、田中角栄首相の訪問にあわせて首都ジャカルタで激しい反日運動が起きた(マラリ事件)直後、治安機関によって逮捕され、2年以上の獄中生活を送った経験がある。

＊博士号論文は「政治経済学―『新秩序』下のインドネシアの事例:1966-80年」。40以上の経済学関連の研究に参画し、50以上の著作・論文がある(著作のうち、3冊はI SEAS、1冊は東京大学/Unescoが発行元。ニューヨークで出版されたものもある)。

＊〈訪日歴〉2002年5月(国際交流会議「アジアの未来」2002)、11月(読売国際経済懇話会・国際通貨シンポジウム)

(アジア政治アナリスト 勝田 悟)